

幼児の性自認に関する諸理論に対する批判的検討

—社会的観点から—

大滝 世津子（児童学科）

A Survey on Gender Identification Theories: From the Viewpoint of Group Dynamics

Setsuko Otaki

Department of Child Studies, Kamakura Women's University

Abstract

This article reviews the existing theories on gender identification of infants from the perspective of group dynamics. The relationships between adults and children inside and outside the home have been emphasized as factors related to gender identification. However, the effects of relationships among children, i.e., group dynamics, observed at institutions such as kindergarten and nursery schools on gender identification remain unclear.

Key words: gender identification, group dynamics, relationship

キーワード：性自認、集団力学、関係性

1. 問題設定

本研究は、幼児の性自認に関する諸理論に対し、社会的観点から批判的検討を加えることを目的とする。具体的には、これまで蓄積されてきた幼児の性自認に対する研究について社会的観点から見た場合、どの部分が有効で、どの部分に限界があるのかについて検討していく。なお、本研究における「性自認に関する諸理論」とは、「発達同一視理論」、「ジェンダー発達理論」、「パーソンの社会化論」、「社会的学習理論」、「認知発達理論」、「ジェンダー・スキーマ理論」、「言語的認知説」のことを指す。また、本研究における「社会的観点」とは、さまざまな社会的観点の中か

ら特に従来の性自認に関する諸理論の中で見落とされがちであり、なおかつ、社会学における幼児を対象としたジェンダー研究の中で重視されてきた「集団における相互行為の影響」のことを指す。

本研究の意義は以下の通りである。これまで幼児が性自認をしていく過程に関しては後述するように、発達の視点から心理学的な理論や研究が蓄積されてきた（Freud 1978; Bandura 1963; Kohlberg 1966; Bem 1981; Parsons 1955; Money & Tucker 1979; Chodorow 1981ほか）。しかしながら、これらは個人の「認知」的側面から性自認を考察することに研究の焦点があるため、社会学の中心的関心の1つである「集団」における相互行

為の影響等については、研究の焦点となりにくかった。

一方で、社会学的な分野においては、既に性自認している子どもを対象とした性役割の獲得（西舩 1998、藤田 2004ほか）、性別カテゴリーの使用法（宮崎 1991、河出 1992、森 1995、藤田 2004ほか）等について、集団における相互行為的な視点から自己の性を社会的に獲得していくプロセスの考察が進められてきた（宮崎 1991、河出 1991、1992、森 1995、木村 1997、西舩 1998、佐藤・三宅 2001、藤田 2004ほか）。これらの研究は、集団の中で、すでに性自認している幼児が性別カテゴリーを使いこなしている様子、保育者が保育の中で性別カテゴリーを使用している様子、性別役割意識が獲得されていく問題性や社会的にジェンダーが作られ、不平等が再生産されていく過程等の解明について貢献してきた。

しかし、社会学の分野では、それ以前の発達過程、すなわち、幼児が性自認するまでの時期については十分に明らかにされてこなかった。これは、社会学の前提として以下のような点があったためであると考えられる。

第1に、言語も未発達な幼児を観察するという方法論的な困難性に加え、ジェンダーをめぐる制度面の分析、性別役割構造、階層、学歴、組織等の構造的要因、相互行為のパターン等の関係領域で社会学が伝統的に関心を持ってきた枠組みが、就学前教育の段階よりも集団化、組織化が進んだ小学校以後の段階でより適用しやすかったという側面が存在する可能性がある。

第2に、これまで社会学において、「性自認」の成立過程については心理学、性自認した後の相互行為過程は社会学という棲み分けがなされてきたように見える。したがって、これまで社会学的研究の中で性自認までの過程を説明する際には、心理学における理論がそのまま援用されてきた（森 1989、河出 1992、江原 2003ほか）。

第3に、社会学的研究においては、性自認がすでに成立したものと見なし、それがあつかうのか否かについての問いを不問に付したまま、看過されてきた傾向がある。

しかしながら、改めて言うまでもなく、子どもは性自認以前の段階から社会における他者との相互行為の中で成長していく存在である。そのため、社会学的観点から研究することは可能であるはずである。さらに、従来社会学的研究が対象としてこなかった性自認以前の段階を社会学的観点から研究することにより、性自認研究の議論の地平が広がり、当該分野の研究のさらなる深化につながる。

そこで社会学的観点からの研究が今後蓄積されていくためにはまず、これまでの性自認理論や研究がどのような対象・方法でなされてきて、何が明らかにされてきたのか、そして、これらの理論や研究を社会学的観点から見た時に、どの部分が有効で、どの部分に限界があるのか、について整理しておくことは重要である。そのため本研究ではこの第1段階として、幼児の性自認に関する諸理論に対し、社会学的観点から批判的検討を加えていく。幼児の性自認に関する実証的研究に対する批判的検討については稿を改めて検討したい。

2. 幼児の性自認に関する諸理論に対する批判的検討

従来幼児の性自認の過程については主に家族関係を対象とした理論として「発達同一視理論」、「ジェンダー発達理論」、「パーソンズの社会化論」、家族関係以外も対象に入れた理論として「社会的学習理論」、「認知発達理論」、「ジェンダー・スキーマ理論」、「言語的認知説」によって説明されてきた。以下では、社会学的観点から見ていこうとする際の各理論の有効性と限界について検討していく。

2.1. 家庭内における両親との関係を軸とした理論

2.1.1. 発達同一視理論

これはフロイト（Freud）が論じたものである。フロイトによれば、幼児は3歳から5歳までの年頃に知識欲・詮索欲が現れるようになり、これにより性的な問題に引きつけられる（Freud 1978：56）。この時期、幼児の性自認はペニスの有無を軸に「去勢コンプレックス」と「ペニス羨望」に

よって展開される。「去勢コンプレックス」とは、男児が、父親が自分に要求する鍛錬や自立に恐怖を感じ、父親が去勢したがつているという幻想をいだくことである。男児は意識・無意識的に、父親を母親の愛情をめぐる競争相手として認知していくが、母親にたいする性愛的感情を抑制し父親を自分よりまさった存在として受容することで、自分と父親を同一化し、自分の男性としてのアイデンティティに気づくようになる (Freud 1978 : 56-57)。

一方、「ペニス羨望」とは女兒が、自分が男児のように一目で判別できるような器官をもっていない事実に苦しむ、というものである。女兒から見れば母親もペニスを欠き、ペニスを自分に与えることができない存在とみなされるため、評価が下がる。女兒は母親と同一化する際、自分を「二流の」存在として認知することで、従順な態度を引き継ぐ (Freud 1978 : 56-57)。

このようにフロイトは、家庭内の親子関係によって幼児が性自認する、という説明をしている。しかし、この理論は実際に幼児を分析することによって導かれたものではなく、成人の回顧談をもとに導かれたものである。こうした方法論的な問題や、女性蔑視の思想が垣間見える点、理論内容の信憑性等をめぐり、これまでさまざまな角度から限界が指摘されてきた (湯川 1995、土場 1999、Giddens 2001)。

それにもかかわらず、心理学においても社会学においても性自認やアイデンティティを論じる際にフロイトがたびたび登場するのはそれなりの有効性があるためである。社会学にとっては、フロイトは人間の「性」を形づくる生物学的な次元と社会的な次元とを初めて明確に区別した人物である、という点に有効性があると指摘されている (加藤 2006)。すなわち、フロイトが性自認のプロセスの解明に乗り出したこと自体が、フロイトにとって、人間が赤ん坊の状態から一人前の女や男になることは「わかりきったこと」ではなく、解明を要する謎であったということを意味しているのである。フロイトは「ジェンダー」という言葉は使用していなかったが、この発想の根本自体

がジェンダー論の世界観につながっていたと考えられる (加藤 2006)。これらの有効性は社会学的观点から見ても重要な点となる。

2.1.2. ジェンダー発達理論

これはナンシー・チョドロウ (Chodorow) が論じたものである。チョドロウはフロイトの初期の発達に関する基本的な考えのいくつかを解釈し直している。チョドロウは、子どもが男性か女性かを自覚する学習はごく幼少期の経験であり、子どもの両親に対する愛着にはじまる、という点では、フロイトと同様の考えをしている。しかし異なるのは、チョドロウがフロイト以上に父親よりも母親の役割を強調している点である。

母親は子どもがまだ幼い頃には最も影響力を及ぼす人間であるため、子どもは情緒的に母親と結びつく傾向がある。このような母親への愛着は、独立した自己意識を獲得するためにある時点で断絶していくことを求められるが、その過程が男児と女兒では異なる形で生ずるとされている (Chodorow 1981)。

女兒の場合、母親と緊密な関係を保つことができ、明確な断絶がない。そのため、女兒や成人女性とは、他者との連続性のある自己意識を発達させていく。女兒のアイデンティティは、最初は母親の、その後はひとりの男性のアイデンティティに、融合あるいは依存していく。この点が女性に感受性や思いやりの心といった特質をもたらす (Chodorow 1981)。

一方男児の場合、出生時からの母親との緊密な結びつきを徹底的に拒絶することで自己意識を獲得し、「女性的でないもの」をもとにして男性性の理解を作り上げていく。その結果、男児は他の人たちと緊密な関係を結ぶことに相対的に未熟で、世の中に対する分析的な見方を発達させていく。男児は自分たちの人生について積極的な考え方をし、業績を重視するが、その過程で自分自身の感情や他人の感情を理解する能力を抑制する (Chodorow 1981)。

このように、この理論ではフロイトと同様、家庭内の親子関係によって幼児が性自認するという

説明をしている。既存研究においては、この理論は、自律しかつ独立した人間になるための女性の苦闘を説明していない点、女性も男性もチョドロウの理論が示唆する以上にその心理的構造が矛盾している点、文化によって母親に求められる役割が異なるということを考慮に入れていない点、フロイトの理論と同様、経験的根拠に基づいていない点 (Golombok & Fivush 1994)、白人中流階級をモデルにした狭い家族概念に基づいている点 (たとえば、1人親世帯や、ひとり以上の大人が子どもたちを養育している家族の場合等が説明できない) (Giddens 2001) 等が限界として指摘されている。

しかしながら、社会学にとっては、フロイトの理論においては持って生まれた性器による宿命として語られていた性自認形成の物語を脱構築し、対象との関係こそが重要であることを主張した点にこの理論の有効性がある。チョドロウは母親という女性が子どもの主要な養育者である、という近代産業社会の核家族の条件に着目した。これが社会的・文化的・歴史的に変な条件である点に注目するならば、性自認はフロイトが持って生まれた性器による宿命として描いたような唯一の筋書きをもつのではなく、子どもを養育する際の社会的・文化的・歴史的諸条件によって多様な筋書きを持つはずである。このことが、フロイトの呪縛から逃れる、という視点から見たときに重要な意義を持っている (土場 1999)。この点が、社会学者でもあるチョドロウによる貢献の核心であるといえるだろう。

社会学的観点にとってもこの点は、非常に重要な点である。「性自認は子どもを養育する際の社会的・文化的・歴史的諸条件によって多様な筋書きを持つ」ということは、このチョドロウの理論が発表された頃と現在の社会的・文化的・歴史的諸条件は異なっているため、現在はこれまで発表されてきた性自認形成をめぐる理論と異なる性自認過程がなされている、という可能性を示唆している。この性自認メカニズムの可変性を指摘したことは、今日の社会的・文化的・歴史的諸条件に基づいた性自認メカニズムを明らかにしようとい

う社会学的観点の意図を支えるものになりうる。

一方で、理論内容に着目すると、フロイトの理論およびチョドロウの理論は家族関係のみを対象としており、家庭外の組織的集団である幼稚園・保育所における性自認メカニズムを説明することはできない。すなわち、これらの理論は大人—子どもという垂直軸を基本としている。それに対して社会学的研究は、この垂直軸と子ども同士のピアという水平軸が相互行為場面における指導や活動を通して、幼稚園・保育所の構造的な特徴と交差するところで出てくる集団的現象として性自認を扱う。したがって、これらの理論には水平軸が含まれていないという点に社会学的観点から見た限界がある。

2.1.3. パーソンズの社会化論

これはパーソンズ & ベールズ (Parsons & Bales) が発表したものである。パーソンズはフロイトから強い影響を受けているため、フロイトの理論を受け継ぎ、フロイトを通じて「心理学と社会学の統合」を図ろうとした。パーソンズらは、1950年代頃に「核家族」が登場したことにより、かつて家族が担っていた様々な機能が外部化され、家族の機能は「子どもの第一次社会化」と「成人のパーソナリティの安定化」という2つの機能に特化されるようになったとする。1組の夫婦とその子どもから成る核家族という集団は上下という力関係の分化と、手段的／表出的という役割関係の分化によって構造化されている。上下関係の次元では、上位者である親は下位者である子どもを庇護・養育・指導し、子どもは親に従い見習うという関係にある。水平的な役割関係の次元では、集団の維持存続に必要な資源を調達する手段的役割と、集団内の調整統合を促進する表出的役割を、夫 (父親) と妻 (母親) が分担している。家族における子どもの社会化はこうした役割構造の中で展開する (Parsons & Bales 2001)。ここがパーソンズ理論における社会学的側面であるといえるだろう。

パーソナリティは口唇依存期、愛着期、潜在期、成熟期という4つの段階を辿って深化発達する。

口唇依存期は、乳児期（フロイトの口唇期）で、この段階では、乳児は授乳（＝口唇）を媒介にして母親に全面的に依存しており、独自のパーソナリティが未発達で、母子一体性が特徴となっている。愛着期は、離乳が始まり、食事や排泄等のしつけが行われる段階で、親子関係の弁別が行われるようになり、それに応じてパーソナリティは上下関係の次元で分化発達し、自律性／従属性が形成される。潜在期は、フロイトのいうところのエディプス期を境にして始まり、親子役割の弁別に加えて、父親と母親の弁別が行われるようになり、それに応じて、パーソナリティは手段的役割と表出的役割の次元でも分化発達する。男の子は父親をモデルにし、女の子は母親をモデルにして社会化が展開する（Parsons & Bales 2002）。

また、パーソンズは「同一化」という用語を使用し、「集合体を支配する価値パターンに従って、他の成員の役割を補足する一定の役割を演ずることを学習することによって、一人の人間が一つの集合体に成員として引き入れられる過程である」（「他の成員のようになる」こと）（Parsons 1964=1973:120）という社会学的な定義をしている。この同一化には「家族との同一化」「性別による同一化」「世代別の同一化」の3種類がある。

ここで「性別による同一化」とされているように、パーソンズの理論においては、人格は男性または女性に同一化するしかなく、この点でフロイトの持っていた性別二元論が引き継がれている。この点をめぐっては、この理論は家族システムのもとで性別同一化を果たすとすることで、近代家族内部における性別秩序をシステムの与件としてしまう非歴史性と性差別性を有している、という批判がなされている（上野 2006）。すなわち、パーソナリティはシステムとしての構築性や動態を前提としていたはずであるにもかかわらず、性別同一化については男女いずれかの二元秩序しか許さない運命論をフロイトから受け継いでいる、といえるのである（上野 2006）。

また、この理論は家族の一般理論というよりも、彼と同時代のアメリカ社会の規範的家族像を反映し、追認したものである（上野 2006）、家族の変

化が進む中で、家族における社会化のプロセスとメカニズムも変化し、性役割（gender role）の内面化やジェンダー・アイデンティティの形成という側面に限ってみても、この図式の妥当性が低下している（天野他 2002）等の点で限界が指摘されている。

このように、この理論はフロイト、チョドロウと同様、家庭内の親子関係によって幼児が性自認するという説明をしているが、役割構造に着目している点、「同一化」概念を社会学的に定義し、使用している点でフロイト、チョドロウの理論とは異なる視点を持つ。したがって、一組の夫婦とその子どもから構成される「核家族」であって「父が家庭外で働き、母が家庭内で家事を担っている」という条件をもつ家庭の幼児に限定すれば、この理論が説明しているようなメカニズムが現在も働いている可能性がある。その点で有効である。一方、フロイト、チョドロウの理論と同様、大人一子どもという垂直軸を基本としており、水平軸が含まれていないという点に社会学的観点から見た限界がある。

以上3つの理論の検討から明らかになったのは①赤ん坊が生まれてから一人前の男性・女性になることは自明のことではなく、社会的な影響を受けるものである、②性自認メカニズムは可変的であり社会的・文化的・歴史的諸状況によって変化する可能性を有するものである、③これら3つの理論はいずれも家庭内における大人一子どもという垂直軸を基本としており、家族関係の外にあるピア集団における水平軸が含まれていない、という点である。

①②の点は、これらの理論が発表された国・時代が現在の日本とは異なる、という条件の違いが存在する事実から考えると、現在の日本における性自認メカニズムはこれらの理論の説明とは異なっている可能性を示唆しているといえるだろう。

2.2. 家庭外における関係を射程に含めた理論

2.2.1. 社会的学習理論

これはバンデュラ（Bandura）、ミッシェル（Mischel）、ウォルターズ（Walters）らが論じた

ものである。バンデューラによれば、幼児の性役割獲得の動機は、外からの報酬や罰にあると考える。そして、多くの性役割以外の行動と同様、性役割行動も「強化」(reinforcement)と「観察」(observational learning)という2つの学習によって獲得される、とする。

まず「強化」であるが、幼児を囲む大人や仲間、幼児が性にふさわしい行動をしたときには誉めたり褒美を与えたりし、ふさわしくないものには罰を与えたりする。その結果、幼児は自らの性に合った行動を学んでいく (Bandura 1963)。次に「観察」であるが、父親と母親といった自分にふさわしいモデルの行動を観察し、まねたりする (modeling) ことによって、幼児は自らの性別に応じた行動や考え方を身につける (Bandura 1963)。

社会化の担い手は親だけではなく、学校、メディア、同世代の仲間等が考えられる (Bandura 1963)。これについてはいくつかの実験により、数名の同性が同じ行動をとったときに、幼児はそれと同様の行動を行うことが報告されている (Bussay & Bandura 1984; Perry & Bussay 1979)。

このように、この理論では幼児が周囲の他者からの反応によって、また、周囲の他者を観察しまねることによって、自らの性別に応じた行動や考え方を身につけていく、という点を指摘している。この理論は幼児がまねをする対象として、学校、メディア、同世代の仲間等を挙げている点で、前述のフロイトらの理論とは異なり、家庭外における水平軸を射程に入れている。したがって、個々の幼児が家庭外の社会に出たときにどのようなことに反応し、何を見て、性自認していくのか、という点を説明することができる可能性を有するという点で社会学的観点にとっても有効な理論である。また、「数名の同性が同じ行動をとったときに、幼児はそれと同様の行動を行う」(Bussay & Bandura 1984; Perry & Bussay 1979) という点は、集団を対象にする際にも参考になるものと考えられる。

ただし、これらの知見は幼稚園等の日常的に存在する組織的集団あるいは組織内の集団の観察によって得られた結果ではなく、研究者が実験を行

う目的で選出したメンバーを対象に、非日常的な空間において行った実験によって得られた結果である。そのため社会学的観点からこれらの知見を参考にする際にはこの点に慎重になる必要があるだろう。

また、この理論については①学習者である幼児を、環境に受動的に反応するものとして扱う傾向がある (土肥 1996)、②どのような行動や特性もすべて強化によって学習されると考えており、性役割の学習に特別のメカニズムを想定しているわけではない、③生物学的性と心理・社会的性の関係についてほとんど考慮されていない (湯川 1995) という点で限界が指摘されている。他方、社会学的観点からすれば、この理論は前述のように、幼稚園・保育所のような実際の家庭外の日常的な集団を対象に導き出されたものではないため、集団における力学を考慮には入れていないという点に限界がある。

2.2.2. 認知発達理論

これはコールバーグ (Kohlberg) らが論じたものである。コールバーグによれば、幼児のジェンダー化の主な要因は幼児の認知的な発達にあると考える。そして、それらの要因によって性役割が獲得されるとする。またこの理論は、性別が自然にあるカテゴリーであるため子どもに取り入れやすいと考える。

コールバーグは生物学的性が環境やさまざまな事象を分類し、概念化する上でのひとつの有力な基準になっていると考えている (ここでいう生物学的性とは、男女の身長や体の大きさの違いといった物理的、身体的な差異)。この身体的差異に対して、性に関する意味づけを子どもが行うことによって、ジェンダーの認識が形成される (Kohlberg 1966)。コールバーグは、自己のジェンダーに関わる認識を主に幼児期について3つの段階で説明している。

すなわち、①性の同一性 (gender identity) : 自分が男なのか女なのかが識別できる、自分がどちらの性のラベルを持っているかがわかること (3歳頃)、②性の安定性 (gender stability) : 男の子、

女の子、父親、母親、男性、女性といった性別ラベルを知り、これらが男と女を分類する普遍的なラベルであることを理解できること（4～5歳頃）、③性の恒常性（gender constancy）：時間が経っても、場所が変わっても、性別は変わらないことが理解できること（6～7歳頃）（Kohlberg 1966）。この3つの段階については研究者間でもおおよその一致を見ているが、年齢に関しては、3～4歳で第3段階に達しているという結果や、7歳でも達していない等さまざまな結果があり、いまだ明らかになっていない（土肥 1996、相良 2000、森永 2004）。

このように、この理論では幼児の性自認は認知的発達の一部であると考えている。この、個人の内部の発達程度が性自認をできる段階に達したから性自認できたのだ、という考え方は社会学において軽視されやすい視点であり、前提としての取入れが可能であるという点で有効である。しかし、既存研究においては、この理論はなぜジェンダーが他のカテゴリー（例えば宗教や人種等）よりも優先的に自己概念に取り入れられるのかに対する考慮に欠けている（土肥 1996）等の点で限界が指摘されている。一方、社会学的観点からすれば、この理論は認知発達の側面に焦点があり、水平軸における仲間との具体的な相互作用や集団的な力学の違いによって性自認メカニズムに違いがあらわれるのか否か、といった点を説明できないという点に限界がある。

2.2.3. ジェンダー・スキーマ理論

これはベム（Bem, S.L.）、マーティン&ハルバーソン（Martin & Halverson）らが論じたものである。ジェンダー・スキーマ（gender schema）とはさまざまな環境における刺激情報の中から、とくに「性」に結びついた情報に注意を向け、記憶し、構造化するための一つの情報処理の枠組みを指す（Bem 1981；Martin & Halverson 1981）。

ベムらによれば、社会が男と女という性の二分的機能を重視して、生物学的性に関係のない事象や情報にまで性を関連づけてカテゴライズするような仕組みになっているため、人々は意識的、無

意識的にこうした性別関連情報を処理する心的枠組みを持つに至った。このようなジェンダー・スキーマは、身体的性差を社会や人々が何にもまして強調することから派生した。生物学的性別から文化的性別へと置き換えられる機制が人々の認知過程におかれている。このジェンダー・スキーマに自己概念が同化された結果、性役割の獲得が生じる（Bem 1981）。

ジェンダー・スキーマによってパーソナリティ特性が男性あるいは女性と認知されると、異性役割のパーソナリティは自らの生物学的性とは相入れないと認知される。そのため、ジェンダー・スキーマは、個人が異性性（男性の場合は女性性、女性の場合は男性性）を自己概念として持つことを抑制する（Bem 1981）。

このように、この理論は子どものジェンダー化の主な要因は社会の側にあると考えている。この考え方は社会学的観点から幼稚園・保育所を研究対象とする際にも参考にできるという点で有効である。しかしながら、既存研究においては、この理論は「人はなぜ両性具有性を形成するに至るかについての考察がない」（土肥 1996）等の点で限界が指摘されている。一方、この理論においては「生物学的性別から文化的性別へと置き換えられるメカニズムが人々の認知過程におかれている」（Bem 1981）とされるが、本研究が定義するところの社会学的観点からの研究はこれを認知過程ではなく、集団との関係という視点から考察する、というスタンスに立つ。したがって、この理論では本研究が定義するところの社会学的観点からの問いに答えることができない、という点に限界がある。

2.2.4. 言語的認知説

これはマネー&タッカー（Money & Tucker）が論じたものである。マネー&タッカーによれば、人の脳の中には男性／女性であるとは何を意味するものなのか、という概念（図式）が組み立てられてくる。その輪郭は身近にいる家族、まず母親、次に父親と兄や姉から始まり、そしてその時期に家族と等しい関係にある人たち、さらにその赤ん

坊の理解範囲が広がるにつれて大きくなる社会の影響によって、作られていく。それらの図式の一つが、自分自身に対して何を期待すべきか、そして自分と同性の人々とどのような関係を持つべきか、ということを示してくれる。もう一方の図式はまわりの異性に何を期待し、どう反応したらよいかを示すこととなる。この2つの図式が一体となって、幼児の性自認と性役割の大部分を規定する (Money & Tucker 1979 : 106-108)。

また、マネー&タッカーは、性自認・性役割は、話し言葉を習得するのとはほとんど同じ方法で習得される、としている。人間は性自認として発達する素のようなものを持って生まれてくるが、ジェンダーに対する配線は完備されていてもプログラムはされていない。そのため、社会からの刺激がなくては男性あるいは女性として分化できない。つまり、ジェンダーに対する生まれつきの傾向と、出生後の数年間にもたらされたジェンダーに関する合図との間の相互作用によって、男性あるいは女性としてはっきりと自認できるようになるのである。さらにその時点で自ら認めたジェンダーが本来の性 (native gender) となり、その後の人生においてどんな行動をとろうと、またどんな運命が定められていようと、その性がいつまでも残り続ける、とする (Money & Tucker 1979 : 109)。

このように、この理論では認知発達理論と同様、発達の影響を視野に入れた一方で、ジェンダー・スキーマ理論と同様、人の脳の中に男性／女性であるとは何を意味するものなのか、という概念 (図式) が形成されると指摘している。さらに、社会的学習理論と同様、社会の影響を指摘しており、これら3つの理論を統合したような理論となっている。

マネーは一卵性双生児の兄弟の一人で、包茎手術中に性器が誤って切り取られてしまった幼児の性器を女性器に変換した。その後その幼児が女兒として生活していくことができた例をもって、この理論を実証したと主張した (Money & Tucker 1979 : 111-118)。しかし、後の調査により、この幼児が女性としての自分になじめず、深刻なアイデンティティ・クライシスを起こしていたことが

判明した。このことをもって逆に男か女かのアイデンティティは生まれつき決まっているものであるという論調も出てきたが、いずれにしろ1つの事例では一般化はできない (加藤 2006)。

このような点からマネーの主張は批判されてきたが、そのことを考慮に入れてもなお、性自認に対する社会的経験の影響の重要性を指摘している点は社会学的観点にとって重要である。特に「人間の性自認も社会からの刺激がなくては男性あるいは女性として分化できない」 (Money & Tucker 1979 : 109) という点は直接的に参考になる記述である。

しかし、社会学的観点からすれば、この理論は家庭外の集団における力学が性自認に与える影響の詳細を説明することはできないという点に限界がある。

以上4つの理論について検討してきた。これによって明らかになったのは、いずれの理論も家庭外における両親以外の大人や仲間が幼児の性自認に影響を与える要因となりうることを指摘しているが、実際の幼稚園・保育所のような日常的・継続的に関係が保たれるような組織的集団の中で生じた集団力学の影響等については説明していない、という点である。

3. 結論

ここでは以上の検証により、明らかになった点をまとめる。

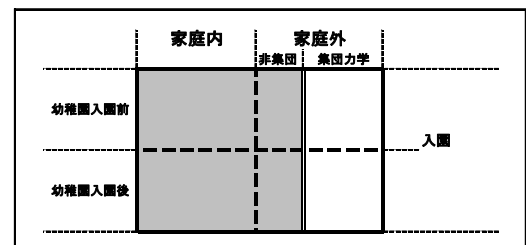


図1：従来の理論が対象とする範囲

図1は、以上の検証により明らかになった、従来の理論が対象とする範囲を図示したものである。列は時系列を示し、幼稚園入園前、後に分けてある。行は家庭内か家庭外かで分けた上で、集団力

学を考慮に入れているか（「集団力学」と記載）、否か（「非集団」と記載）で分けてある。その上で、該当するセルにグレーをかけてある。

図1について見てみよう。従来の理論は、家庭内を対象としたもの（発達同一視理論、ジェンダー発達理論、パーソンズの社会化論）と、家庭外を対象に含んだもの（社会的学習理論、認知発達理論、ジェンダー・スキーマ理論、言語的認知説）があった。発達同一視理論、ジェンダー発達理論、パーソンズの社会化論は、家庭内における大人―子どもという垂直軸を基本としており、子ども同士のピアという水平軸が含まれていなかった。ここに社会学的観点から見た限界があった。

一方で、社会的学習理論、認知発達理論、ジェンダー・スキーマ理論、言語的認知説においては家庭外における両親以外の大人や仲間が幼児の性自認に影響を与える要因となりうることを指摘しているが、実際の幼稚園・保育所のような日常的・継続的に関係が保たれるような組織的集団の中で生じた集団力学（継続的な人間関係や力関係等）の影響等については説明していない。社会学的観点ではこの集団力学の影響に着目するため、これを説明しきれないという点に限界があった。

また、これらの理論は年齢としては幼稚園入園前の時期から幼稚園入園後に該当するまでの年齢に言及されていた。以上より、これらを総合すると、図1のグレーの部分を対象としていたと言える。そして、図1におけるグレーのかかっていない白い部分は従来の理論では明らかにされておらず、社会学的観点からの研究がこの部分を解明することで、性自認に関する研究の地平が広がるであろうことが示唆された。また、本研究の知見を用いることにより、今後社会学的研究が従来の性自認に関する諸理論を援用する際に、社会学的観点から見た有効性と限界について自覚的に用いることで、さらなる議論の精緻化に繋がることが期待される。

本研究は幼児の性自認に関する諸理論に対し、社会学的観点から批判的検討を加えることで、以上のような結論を得た。これにより、社会学的観点から幼児の性自認に関する研究を行う際の一助

となることを試みた。今後はさらに、幼児の性自認に関する実証的研究に対する批判的検討についても稿を改めて検討していきたい。

参考文献

- ・天野郁夫・藤田英典・菊谷剛彦著，2002，『教育社会学』放送大学教育振興会。
- ・Anthony Giddens, 1989, *Sociology*. Cambridge: Polity Press. (= 2001, 『社会学』，而立書房)。
- ・Bandura, A., & R. H. Walters, 1963, *Social Learning and Personality Development*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- ・Bem, S.L., 1981, "Gender Schema Theory: A Cognitive Account of Sex Typing." *Psychological Review* 88:354-364.
- ・Bussy, K., & A. Bandura, 1984, "Influence of Gender Constancy and Social Power on Sex-Linked Modeling," *Journal of Psychology* 47: 1292-1302.
- ・Chodorow, N., 1978, *The Reproduction of Mothering*. Berkeley, CA: University of California Press. (=1981, 大塚光子・大分菅子訳『母親業の再生産』新曜社)。
- ・土場学，1999，『ポスト・ジェンダーの社会理論』青弓社。
- ・土肥伊都子，1996，「ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成」『日本教育心理学研究』44: 187-194.
- ・江原由美子，2003，『ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会。
- ・藤田由美子，2004，「幼児期における『ジェンダー形成』再考―相互作用場面にみる権力関係の分析より―」『教育社会学研究』74: 329-348.
- ・Freud, S, 1978, 懸田訳，「解剖的な性の差別の心的帰属の2，3について」『改訂版 フロイド選集5 性欲論』日本教文社: 287-306. (=1927, *Einige psychische forgen des anatomischen geschlechtsunterschiedes*. Leipzig, Wien, Zurich: Fischer Verlag.)
- ・Golombok, S. & R. Fivush, 1994, *Gender Development*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- ・加藤秀一，2006，『知らないと恥ずかしい ジェンダー入門』朝日新聞社。
- ・河出三枝子，1991，「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論―基本的考察と問題設定―」『岡崎女子短

- 期大学研究紀要』25: 1-12.
- ・河出三枝子, 1992, 「ジェンダー・フェイズからの幼児教育試論—保育現場におけるジェンダー・プラクティス—」『岡崎女子短期大学研究紀要』26: 11-35.
 - ・木村涼子, 1997, 「教室におけるジェンダー形成」『教育社会学研究』61: 39-53.
 - ・Kohlberg, L. A., 1966, "Cognitive-Developmental Analysis of Children's Sex-role Concepts and Attitudes." Pp.82-172 in E. E. Maccoby (ed.), *The Development of Sex Differences*. Stanford: Stanford University Press.
 - ・宮崎あゆみ, 1991, 「学校における『性役割の社会化』再考—教師による性別カテゴリー使用をてがかりとして—」, 『教育社会学研究』48: 105-123.
 - ・Money, J., P. Tucker, 1975, *Sexual Signatures*. Boston: Little, Brown and Company, Inc. (=1979, 朝山新一訳『性の署名』人文書院).
 - ・森永康子, 2004, 「男らしさ・女らしさへの歩み」, 青野篤子・森永康子・土肥伊都子著『ジェンダーの心理学』ミネルヴァ書房: 72-99.
 - ・森繁男, 1989, 「性役割の学習としつけ行為」柴野昌山編『しつけの社会学—社会化と社会統制—』世界思想社.
 - ・森繁男, 1995, 「幼児教育とジェンダー構成」竹内洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社: 132-149.
 - ・西舩容子, 1998, 「『ジェンダーと学校教育』研究の視覚転換—ポスト構造主義的展開へ—」『教育社会学研究』62: 5-21.
 - ・Parsons, T., & R. F. Bales, 1955, *Family: Socialization and Interaction Process*. Glencoe: Free Press. (=2001, 橋爪真雄他訳, 『核家族と子どもの社会化—家族—』, 黎明書房).
 - ・Parsons, T, 1964, *Social Structure and Personality*: Free Press. (=1973, 武田良三他訳, 『社会構造とパーソナリティ』, 新泉社)
 - ・Perry, D.G. & K. Bussey, 1979, "The Social Learning Theory of Sex Differences: Information is Alive and Well." *Journal of Personality and Social Psychology* 37: 1699-1712.
 - ・相良順子, 2000, 「幼児・児童期のジェンダーの発達」『ジェンダーの発達心理学』ミネルヴァ書房: 14-31.
 - ・佐藤和順・三宅茂夫, 2001, 「幼稚園における集団の教育力についての一考察—ジェンダーの観点から—」『幼年児童教育研究』13: 13-25.
 - ・上野千鶴子[編], 2006, 『脱アイデンティティ』, 勁草書房.
 - ・湯川隆子, 1995, 「性差の研究」, 柏木恵子+高橋恵子編著, 『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房: 116-140.

要旨

本研究は幼児の性自認に関する諸理論に対し、社会学的観点から批判的検討を加えることを目的とし、有効性と限界を検討した。

その結果、以下の点が明らかになった。①発達同一視理論、ジェンダー発達理論、パーソンズの社会化論は、家庭内における大人—子どもという垂直軸を基本としており、子ども同士のピアという水平軸が含まれていなかったという点に限界があった。

②社会的学習理論、認知発達理論、ジェンダー・スキーマ理論、言語的認知説は、家庭外における大人や仲間の影響を指摘している点に有効性があるが、幼稚園や保育所のような組織的集団の中で生じた集団力学の影響等については説明していない点に限界があった。

(2014年9月18日受稿)